

シンポジウム
研究班発表

日本における中国イ族の神話・民話に関する研究

趙 蕤

皆さんこんにちは、西南民族大学の趙蕤と申します。まず報告に先立ちまして、今回のような貴重な発表チャンスを与えてくださった高橋先生、周星先生、関係の皆様には厚くお礼申し上げます。今回の発表のテーマは「日本における中国イ族の神話・民話に関する研究」です。

まずイ族について簡単に紹介させていただきます。イ族は中国の少数民族の一つで、中国の四川省、雲南省、貴州省、広西省、四つの省、自治区に分類して、国外にもミャンマー、タイ北部、ベトナム北部に至っています。イ族の人口は800万人ぐらいで、中国政府が公認する56の民族の中に7番目に多いです。イ族の支系が非常に多くて、俗称も複雑です。例えば「ロロ」、「ナスポ」、「ロスポ」など、いろいろあります。山奥に生活している少数民族ですが、独自の文字があります。そして神話をはじめとする貴重な民間伝承を持っています。

中国のイ族研究については欧米の学者が19世紀の後半から始まりました。まずフランス人はベトナムから雲南省のイ族地域に入って調査を始めました。そのときベトナムはフランスの植民地でしたから。それからアメリカ人、イギリス人も続々イ族の地域に入って調査を行いました。でも1世紀余りの間に欧米の学者たちはイ族の研究について、主に社会性と歴史的な起源、文字などの問題にとどまっていました。特にイ族の民間伝承について、あまり研究をされていなかったのです。

イ族神話、民話の研究の領域を広げると同時に深めていたのは隣国である日本の学者たちでした。この新たな局面の出現は日本民俗学の先駆者である鳥居龍蔵博士に遡ることができます。私は日本学者のイ族の民間伝承の研究を四つの時代に分けました。初めは鳥居龍蔵のイ族神話研究、次は第二次世界大戦から日中国交正常化までです。第三は日中国交正常化から1980年代の末までです。最後は1990年前後から今までです。まずは鳥居龍蔵のイ族の神話研究について。1902年から1903年にかけて鳥居龍蔵は台湾の生藩と中国大陸の西南のミャオ族とが人類学上に密接な関係を持っているのではないかという疑問を持って、中国西南地域へミャオ族の調査を行いました。そして以前から興味を持っていたイ族の調査のために、四川、雲南、貴州、三省のイ族地域に調査を広げました。1907年には『獠猓の神話』、『獠猓種族の体質』、『獠猓の文字』など、イ族に関する研究を発表しました。ロロっていうのはイ族の自称ですよ、自称の一つです。しかし鳥居龍蔵がイ族神話を研究する素材としては、2人のヨーロッパ人の著作から抜いたのです。イギリスのオー・ヘンリー氏が「西南支那の3年間」の中に論じられているロロの神話とフランスのカトリック宣教師、パロウエアが1898年上海で発表した「Les Lolos」の中で論じられている神話です。パロウエアは雲南のイ族自治区で30年あまり生活して布教して、イ族の言葉とか文字とかすごくできて、彼のイ族研究は

すごく評価されています。鳥居龍蔵は2人の著作の内容からイ族の神話を三つの時代に分けています。天の創造及び地の形成時代、早魃時代、洪水時代です。そしてイ族の洪水神話は欧米の神話とよく似て、だからシリアと関係があって、ネストリアク教が古くからイ族の文化に影響を及ぼした結果だと鳥居龍蔵は考えました。鳥居龍蔵は中国の西南研究に大きな貢献をしました。まず、発表した民俗的資料はイ学研究に大きな影響を与えました。そして方法論のうえでも、フィールドワークという実証的な研究方法に道を開きました。でも、欠点があると私は思っています。まずは検討した資料は直接イ族から取材しなかったのです。二つ目は比較方法は若干恣意的にすぎると点があると思います。

次の時代は第二次世界大戦から日中国交正常化までです。日本では、戦後日本民族の形成、日本民族文化の源流についての討論がブームになっています。民間伝承も学者たちは日本の周囲の国々の民族に伝わる神話、昔話、伝説などの多角的な視野から、日本文化の源流を探求しています。この時代代表的な学者は松本信廣、大林太良などで、イ族に関する著作は「哀牢夷の帰属問題について」、「日本神話の起源」、「稲作の神話」などです。この時代には学者たちは南方説を提唱して、中国の西南少数民族の神話に関心を向けました。しかし、この時代は政治などが原因で、中国でのフィールドワークは不可能だったので、イ族の神話の研究について、主に文献を中心として分析しました。イ族と日本の神話を比較すると、一見無縁のように思われるんですが、いくつかの類似点が見つかり、日本の神話は日本の南の国から日本に流れこんで、遠い古代の文化の姿が復元できると2人は論じています。この時代のイ族神話研究は、学者の人数も論文数も少なかったですが、中国西南少数民族の民間伝承の研究を日本の神話の学

者たちに呼びかけて、活発な研究を次世代に実現させるように働きかけました。

第3の研究時代は日中国交正常化から1980年代の末までです。この時代は学者たちは「南方説」のあとを継いで中国西南少数民族の民間伝承の研究を続けました。そしてこの時代、植物学者の中尾佐助氏、民族学者の佐々木高明氏らによって「照葉樹林文化論」が提唱されました。「照葉樹林文化論」は文化人類学の一学説です。ヒマラヤから東南アジア北部、中国南部、西日本にかけて、広がる常緑広葉樹林帯に住む民族が共有されている文化があると唱えています。神話伝説をはじめ、各種習俗に共通点が多く見られて、日本の伝統文化の基礎をなすというものです。照葉樹林の文化の影響に加えて、中国文学の研究者である伊藤清司、君島久子、村上順子、谷野典之などのイ族民間伝承研究を活発に行うようになりました。こちらは代表の作品です。

伊藤清司：「日本神話と中国神話」学生社1979、「中国民話の旅から 雲貴高原の稲作伝承」日本放送出版協会（NHKブックス）1985

君島久子：「日本民間伝承の源流 日本基層文化の探求」小学館1989.4、「東アジアの創世神話」弘文堂、1989

村上順子：「西南中国の少数民族にみられる洪水神話」（古代日本と東南アジア（東アジアの古代文化一別冊））大和書房、1975

谷野典之：『貴州省西北部イ族のイ文経典にみえる「六祖神話」の形成について』立教大学研究報告〈人文学科〉(47) 73-101 1988年2月、「創世神話に見る雲南貴州少数民族の宇宙観」季刊自然と文化 日本ナショナルトラスト (24) 32-37 1989年3月

この時代の特徴について学者たちは松本信廣の日本民族形成論の「南方説」のあとを継いで、これまでの騎馬民族説に代表される「北方説」と違って新しい視野で中国の西南から

日本民族文化の源流を探っています。柳田國男は「一国民俗学」を強く唱道して、継承論的研究法、重出立証法を唱えましたから、海外との比較研究を否定したのです。しかし、伊藤清司を代表している学者たちがこの研究方法に疑問を持って、イ族の研究や昔話との研究をとおして、日本の民間説話の成立は継承論ではなく、移動論で説くべき民間伝承されたのであると提唱しました。そして大林氏、松本氏の時代に比べて、イ族地域でフィールドワークができて、神話に限らず、伝説、昔話などにも豊富な資料を集められて、質のいい比較研究が行われました。

最後の時代は 1990 年代前半から今までです。この時代は工藤隆を代表している日本古代文学研究者はイ族の生きている神話、生きている歌垣などを利用して日本古代文学の古層を探って、『古事記』以前の文字のない時代の文学を復元しようとしてしました。この時代は代表的な学者は工藤隆、真下厚、百田弥栄子、岡部隆志、遠藤耕太郎などです。こちらは代表的な作品です。

工藤隆：「歌垣と神話をさかのぼる 少数民族文化としての日本古代文学」新典社選書 1999

「四川省大凉山イ族創世神話調査記録」大修館書店 2003

「古事記の起源を探る創世神話」真下厚,百田弥栄子共編 三弥井書店 2013

岡部隆志：「中国少数民族歌垣調査全記録 1998」工藤隆共著 大修館書店 2000

「神話と自然宗教 (アニミズム) 中国雲南省少数民族の精神世界」三弥井書店 2013

遠藤耕太郎：「古事記歌謡の表記と口誦性」

「国語と国文学」2013年5月号

「歌の起源を探る 歌垣」三弥生書店 2011

学者たちが主な見方は、まずは『古事記』のように国家生成期に文字で編纂された国家

段階の神話と縄文、弥生時代の日本の村社会の神話を区別して論じる必要があると唱えました。『古事記』の典拠や原形を求めるべき書物が日本国内にはありません。そして、日本の『古事記』以前の文学モデルを作るには原則として、風土、習俗などに共通性が見られる民族と比較する必要があると唱えました。そして、そこでイ族の文化、風俗は古代日本と似ていることが多いことからイ族が今でも音声で伝承している創世神話などを通じて『古事記』以前の日本の文化層に迫ることができるかと論じました。歌垣も同じで、イ族をはじめとする西南少数民族の生きている歌垣をモデルとして日本古代の歌文化を捉えなおすことができると唱えています。私の考えとしては、この時代の特徴が日本の学者は生きている神話、生きている歌垣が今なお残る中国長江流域の少数民族文化を調査して日本神話、歌垣の成立過程のモデルを大胆に構築することにより、『古事記』以前の文化の真相を読み直すことができるようになりました。そして、工藤氏はイ族の創世神話などとおして、神話の現場の 8 段階理論を提唱したことにより、無文字時代の和族の言葉、表現世界を浮かび上がらせることができると考えます。

これまで紹介したイ族民間伝承を研究している日本の学者たちはそれぞれ研究内容が異なっていますが、優れた成果を得ることができました。最後に研究特徴をまとめます。メリットとしては中国少数民族神話などの研究について、単に文献の中心とする研究方法からフィールドワークと併せることにより、新たな視点から日本の民間伝承研究ができるようになりました。工藤隆などはイ族の発音表記、国際音声表記と中国語訳、日本語訳のセットで、かつビデオ映像もつけて記録する方法は、資料的価値がとても高いです。写真は左側はイ族の生きている歌垣、右側は葬式で

歌われる歌です。日本語、中国語、イ族語、国際音声で表記されています。そして日本人は集団意識が強くて、研究者たちが共同研究することによって立派な研究業績を上げました。もちろん、デメリットがあると私は思っています。まずは、日本の研究者のフィールドワークの時間が短くて、毎回大体1カ月以内です。深く取材できているかどうかは、中国学者は疑問を持っています。20世紀に入って若い学者があまりいないため研究継承ができず、日本における中国イ族の民間伝承の研究の大きな問題になると考えます。以上は報告の内容です。今、研究しているところで不十分なのが結構あると思ってこれからも研究を続けます。ご清聴どうもありがとうございました。